

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 16 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370878

研究課題名(和文) 1780年代フランス外交政策に関する史料学的研究

研究課題名(英文) The research about French diplomatic policy in the 1780s through historical materials

研究代表者

森原 隆 (Moriyara, Takashi)

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：70183663

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、近世フランスの外交政策とくにイギリス、アメリカに対する対外交渉の展開を、フランスの外交書簡を中心にした文書・文献資料の渉猟と解説をとおして分析し、とりわけ1780年代のヴェルジェンヌ外務卿時代(1774年～1787年)のフランス外交の意味や意義を、ヨーロッパだけではなくオスマン帝国、ポルトガル、スペイン、ロシア、ポーランドなども含めたグローバルな視点から捉えなおそうとしたものである。史料としては、とくにヴェルジェンヌ外務卿や外務係官による外交書簡、指令書、認可書、会計文書などに関して、フランス外務省の外交文書館や国立古文書館などの手稿史料を中心に分析した。

研究成果の概要(英文)：This research studies about the pre-modern French diplomatic policy, especially the counter-one against the Great Britain and the United States of America, through the French diplomatic documents, resources and manuscripts. The comte de Vergenne is known as a great foreign minister of this period of the 1780s. But in our country, there are few studies about his career and achievements. So, this is almost the first research to deal with this lesser-known aspect and critical part he played in French diplomacy. I investigated about his diplomatic career and ideas by way of visiting the historical sites and analyzing historical materials in Istanbul(the Ottoman Empire), Lisbon, Warszawa, Madrid and Paris.

研究分野：人文学

キーワード：ヴェルジェンヌ フランス革命 アメリカ独立戦争 フランス外交 外務大臣

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究が目指す、近代フランスの外交政策研究に関しては、これまでのわが国のフランス史研究の中において、伝統的な封建制度やフランス革命との関連を前提にした内政面での分析に重点がおかれてきた関係で、一部の政治理論や思想史的研究を除けば、翻訳などの概説的な紹介に依存し、専門的な研究はほとんどなされていないのが現状であった。それぞれの時期の外務卿個人に関する研究はおろか、当時の外務卿府の実態についても明らかにされているとはいえなかった。当時の外交政策の原則は、例えば一般的に「勢力均衡」といわれるが、その学術研究による実証的な裏付けや分析は充分なされていないのが実情であった。とりわけ、18世紀フランスのショワズールやヴェルジェンヌなど傑出した外務卿の外交政策の精緻な研究が最低限不可欠であるが、本研究は、その中で、フランス革命前夜に活躍したヴェルジェンヌ時代(1774年 - 1787年)に焦点をあてたものである。本研究は、このような研究史上の大きな欠落のある領域に関わるものであり、基本的な知識や情報の収集や確認から、研究を開始せざるをえなかった。とくに近世フランスの外交政策と外務卿、外務卿府について、史料分析の観点から、より実態に即した像の提示と検討を心がけた。

(2) 近年、近世フランス史研究で注目されている「世論」や「公共性」「公共圏」の形成に、従来言われてきた読者・市民・民衆のような下のレベルからだけではなく、絶対王政の王権側や公権力がいかに関わり、対応してきたかを問うことで、専制から合意の政治へと転換しつつある、その手法や意匠の問題を解明することを目指した。この観点から、本研究は、研究代表者の専門である17・18世紀フランスの新聞・雑誌研究やジャーナリズム形成の問題と関連付け、「ジャーナリズムによる世論形成と王権の対応」というテー

マを意識し、とりわけヴェルジェンヌ時代における世論形成の問題を捉えようとした。

(3) 本研究によるフランス外交政策、外交問題の実証的な解明は、フランス一国の問題として処理されるものではなく、フランスを取り巻くヨーロッパ諸国家(イギリス、スペイン、ロシア)や、オスマン帝国などとの関係からグローバルな国際関係として理解しようとするものであった。とりわけ、ヴェルジェンヌ外務卿の時代は、アメリカ独立戦争やフランス革命につながる重要な時代であり、この間つねに中心的な役割を果たしてきたフランス外交政策、外交路線が明らかになることで、これら国際戦争や革命の意義や意味をあらたに問われることになると考えた。

2. 研究の目的

(1) 1770年代から1780年代にかけての外務卿ヴェルジェンヌ時代(1774-1787年)に焦点をしばり、史料に基づいた当時のフランス外交のあり方を考察すること。具体的には、対アメリカ、イギリス、オーストリア、プロシア、ロシア、スペイン、トルコとの外交を中心に、外交文書をとおした当時の政策論議を明らかにすること。

(2) ヴェルジェンヌ個人について、アメリカ独立戦争への参加や革命前夜の激動期に外務卿を務めた重要人物であるにもかかわらず、わがくにはまとまった研究が全くなく、その出身・経歴・生涯についても充分知られていない。ヴェルジェンヌの外交官、大使、外務大臣としての個人的な足跡をたどりながら、ヴェルジェンヌの個人史的な研究を行いたいと考えた。

(3) いわゆる「世論」との関係で、ヴェルジェンヌがいかに世論の動向に注目し、外交政策の中に、世論対策を組み入れていたかを分析する。具体的には、1778年における『メルキュール』誌の政治雑誌化、1783年における『ガゼット』紙の改革、「ジュルナル・ポリティーク」の問題をとおして、ジャーナ

リズムという観点から、ヴェルジェンヌ時代のもつ意味と世論が当時の政治の動向に与えた影響を再検討する。

3. 研究の方法

(1) 本研究は、史料学的な研究を目指すものであり、徹底した史料調査と関連文献、研究文献の入手に努めた。とくにヴェルジェンヌと外務卿府関連の手稿史料(マニユスクリプト)の分析に重点を置くため、フランス各地に散在する手稿史料の入手に努力した。主な文書館、図書館と代表的な関連文献は下記のごとくである(詳細番号は省略)。

○フランス外務省文書館

Archives des affaires étrangères(A.A.E.)

Affaires diverses politiques.

Correspondance politique, Hollande.etc

Mémoires et documents, France.etc.

○フランス国立古文書館

Archives nationales(A.N.)

Minutier central des Archives nationales.

○フランス国立図書館

Bibliothèque national de France(B.N.)

(2) ヴェルジェンヌ個人の外交官、大使、外務卿としての足跡を辿り、資料・文献収集と関連施設の調査のため、フランス各地の関連地(パリ)、ディジョン(出生地)、関連各国、トルコ(大使)、スペイン(外交関係)、ポルトガル(外交官派遣)、ギリシアなどで現地調査を行った。ヴェルジェンヌの経歴との関係は、研究成果を参照。

(3) 「世論」と外務卿ヴェルジェンヌの関係を考察するため、とくに、アメリカ戦争時のフランス参戦における、ヴェルジェンヌの関わりを探り、下記の雑誌に注目した。

Affaires de l'Angleterre et de

l'Amérique(A.A.A.) これは、ヴェルジェンヌがアメリカ独立戦争へのプロパガンダ雑誌として刊行させたものである。

Mercure de France, Gazette de France

1778 年以後、この雑誌を政治雑誌化するこ

とでアメリカ独立戦争のキャンペーンに利用した。これら 3 雑誌のアメリカ独立戦争関連の記事の詳細な誌面分析を、とくに 1778 に焦点をあてて行った。

4. 研究成果

○ヴェルジェンヌの経歴・職務関係に関してはわが国には、ほとんど研究がなく、概説書すら見当たらない。よって本研究は、ヴェルジェンヌの生涯についての詳細な検討を行うことを趣旨として行った。それぞれの時期に重要な研究テーマがあるので、ここでは、その概略を示す。

・出身階層について

1719 年 12 月 28 日にヴェルジェンヌはディジョンに生まれたが、地方貴族いわゆる新貴族 anoblis・法服貴族(3 代継続による)に属しており、この点で、ヴェルジェンヌの活動に伝統的な帯剣貴族(例えば、ショワズル外務卿)との軋轢を生ずることになる。この貴族内部における対立がヴェルジェンヌの昇進・職務や人間関係に大きな影響を及ぼしたと考えられる。

兄 Jean Gravier(Marquis de Vergennes)も官僚であるが、ヴェルジェンヌ家の家系についての詳細な経緯を研究論文等で掌握した。3 歳時に母親の死。父の再婚。イエズス会の教育を受けた点も重要である。

・外交官活動について

1739 年(20 歳) リスボンに派遣 叔父(遠縁)ポルトガル大使シャヴィニーTheodore Chevignard de Chavigny に大使付き評議官として随行 シャヴィニーは、この時代の有力政治家であり、外務卿ショワズルと対立していた。この間、スペインにもたびたび訪れることになり、外交交渉に参加する。後にアメリカ独立戦争にスペインを参戦させる戦略を講じるが、このときの外交経験が活かされる(スペイン・マドリードの宮廷と南部アンダルシアの貿易都市、セヴィーリア、カディス、コルドバにおける外交・貿易施設を

調査)。スペインは、ルイ 14 世時代のスペイン継承戦争の成果として、スペイン・ブルボン家が王位を継承することになったが、この時代は、フランスにとってつねに外交関係のパートナーとなっていた。

1743 年 ババリア公・神聖ローマ皇帝カール 7 世の宮廷に派遣。オーストリア継承戦争への布石であったが、1745 年 カール 5 世の死によりマクシミリアン 3 世が神聖ローマ皇帝となったため、解任。ポルトガルへ戻り、ポルトガルとの貿易活動の発展に尽力した(ポルトガルの貿易・商業活動についてリスボンで関連調査)。

1749 年 フランスに帰国 外務卿ピュイジユール男爵の知遇を得る

1750 年 トリール選帝侯への大使として派遣され、オーストリア対策をイギリスに対抗する形で講ずる。

1755 年 オスマン帝国に大臣全権大使 minister plenipotentiary 次いで、大使 ambassador として任命される。ヴェルジェンヌはスルタン・オスマン 3 世と直接外交交渉を展開する。オスマン帝国は、16 世紀以来「キャピチュレーション」(最恵国待遇)で知られるように、フランスと早期から同盟関係にあったが、この時代には弱体化し、ロシアの脅威にさらされていた。ヴェルジェンヌは、プロシアとともに対ロシア戦略を練る。(オスマン外交関連施設(トプカプ宮殿、軍事博物館など)と関連史料の調査を行う。)しかし、7 年戦争が勃発し、いわゆる「外交革命」によりフランスは、オーストリア・ロシアと協力関係を結び、方針を転換して対イギリス・プロイセン戦争を展開する。オスマンは新フランス・オーストリア同盟に反対。オスマンとロシアの関係が悪化しヴェルジェンヌは、その調停に乗り出す。

1763 年のパリ条約によりフランスはイギリスに大幅な譲歩を強いられる。フランスはポーランドにおける影響を低下させる。ポーラ

ンドでは、ロシアの指示を受けたスタニスラス・ポニャトフスキーが新国王に即位するが、フランスの勢力は弱体化し、逆にロシアの影響力が増大し、後のポーランド分割の基盤をつくることになる(ポーランド・ワルシャワの宮廷・外交使節の調査を執行)。

1768 年に未亡人であるアンヌ・デュヴィヴィエと結婚したが、国王の同意を得ずに行ったことが不興をかい、またこの時期の外務卿ショワズールはロシアとトルコの戦争を画策しようとしたが、ヴェルジェンヌでは不適格として、この年に彼のトルコ大使を解任した。ショワズールとヴェルジェンヌの人間関係が悪化した。この二人の人間関係がその後の、フランス外交政策に大きな影響を及ぼすことになる。しかし、実際はロシア・トルコ戦争が勃発し、ロシア側の大勝利に終わる。1770 年、解任されていたヴェルジェンヌは、スウェーデン大使に任ぜられ、グスターヴ 3 世のクーデタを支持し、外交上の勝利を獲得した。

・外務卿時代(1774 - 1781 年)

1774 年、ルイ 16 世即位に伴い、外務卿に就任。これに関しては、国王の助言者(宰相格)となったモールバや国王の叔母たち(アデアイドなど)の進言によると思われる。外務卿としての最大の問題は、アメリカ独立戦争への介入の問題であった。ヴェルジェンヌはボーマルシェらの提案する、アメリカ独立派への密かな武器・物資の供給、義勇兵派遣などの援助策を行使した。また、イギリスには合衆国の承認と条約の締結を通告した。しかし、1777 年のサラトガの戦いにおけるイギリスの敗北によって、イギリスと独立軍が単独で講和条約を結ぶことを警戒し、ヴェルジェンヌはスペインと協力して武力介入することを決意した。1778 年にフランスは、独立戦争に参戦し、デステン提督の指揮のもとで軍隊を派遣。1779 年にはスペインの参戦により、早期決着を図った。ヴェルジェンヌ

は、ロシアのカザリン 2 世に北ヨーロッパ各国を中心にした武装中立同盟の締結を推進させたが、イギリス・デンマーク戦争が勃発し、情勢が複雑化した。また、オーストリアとプロイセン間でバーバリア継承問題が発生した。1781 年のヨークタウンの陥落にフランス軍が重要な役割を演じた。

○宰相・外務卿時代（1781 - 1787 年）

モールパの死（1781 年 11 月 21 日）によって、ヴェルジェンヌは事実上の宰相の地位につく。1782 年フランス艦隊は西インドへ派遣され、ジャマイカのイギリス植民地と対抗。また、フランス・スペイン連合軍が、イギリスのジブラルタル植民地を攻撃したが、失敗。アメリカ独立軍が、イギリスとの単独講和の動きを見せたため、フランスもイギリスとの講和条約の交渉を始めた。1783 年に正式にパリ条約が締結されたが、フランスは、アフリカの貿易拠点として、トバゴを獲得しただけで大きな成果を得られなかった。ヴェルジェンヌはインドシナへの遠征を国王に進言し、これが仏領インドシナへと発展した。

1781 年、ヴェルジェンヌは経済諮問会議の長となり、財務総監ネッケルの解任を画策。1783 年に、カロンヌが財務総監となる。その後も国策全般を監督した。名士会の招集は、ヴェルジェンヌの発案であったと考えられる。1787 年 2 月 13 日に死去。

○ヴェルジェンヌ研究の問題点

（1）ヴェルジェンヌに関しては、わがくにはほとんどまとまった研究がなく、概説的な情報や知識が不足している。今後は、それぞれ個別のテーマに関して、詳細な分析を進めてゆく必要がある。研究代表者は、これまで述べてきているように、個々のテーマでの分析をすでに進めてきているが、これにはさらに時間と労力が必要になる。ヴェルジェンヌに関する史料は膨大であるが、その所在についてはほぼ把握できている。例えば、国王とヴェルジェンヌの往復書簡について

は、J.ハードマンと M.ブライスが書簡集と解説をすでに公刊している。この二人の間でいかなる情報のやり取りがなされていたかはほぼ把握できる。この点で、これまでルイ 16 世は即位当初は、政治に関心を示したが、その後は無関心になっていったという通説的な理解は誤っていることが明白になった。ヴェルジェンヌが 1787 年に死去するまで、外交・内政にわたって、ルイ 16 世は彼と書簡を密に取り交わし、政治に関心を示し続けた。また、王権内部での人間関係の問題が、この時代のフランスの王政の展開に大きな影響をもっていたことも明白になった。外交問題に限定してみても、例えばショワズール及びショワズール派は 1785 年のショワズールの死に至るまで、大きな影響を与えていた。またモールパとポンパドール夫人の確執、デュ・バリール夫人とショワズールの確執、王妃マリー・アントワネットとヴェルジェンヌの確執、ショワズールとヴェルジェンヌの不仲、モールパとヴェルジェンヌの指導関係など、枚挙にいとまがない。さらに、外務卿府内部がどのような部局・担当でいかなる人員が配置されていたかについても、わがくには全く研究はないが、ほぼ関連文献の収集と調査によって、今後まとまった分析結果を提出する予定である。

（2）世論形成の問題

これに関しては、ヴェルジェンヌ外務卿時代に、1778 年『メルキュール・フランス』誌の政治雑誌化、『ガゼット』の国家保有や『アナール・ポリティーク』の御用雑誌化をとおり、アメリカ独立戦争の推進に向けて、世論の煽動を意図した政策が実行されていたことが明白になった。これに関する史料もほぼ所在が把握できたので、いずれ、個々の事件や事象に関する分析に入ることが可能になった。

（3）近世フランス外交の分析

ヴェルジェンヌだけではなく、近世フランス

の外交政策全体についての研究に着手した。17・18世紀のルイ14世時代から、外務卿・外務卿府の整備が進み、近代的なフランスの外交政策が展開されてきたが、この全貌については、わが国には全くまとまった研究がない。フランス歴代の外務卿と外務卿府の実態の解明と、イギリス・オーストリア・スペイン・プロイセン・ロシア・ポーランド・トルコ・スウェーデン・デンマークなどヨーロッパ諸国、およびイタリア諸都市やオスマン帝国との外交政策全般を再検討する必要がある。例えば、一般的に指摘されている「勢力均衡政策」などの外交理念がどの程度図られてきたか、実証的な見地からこれを再検討する必要がある。また、本研究で、ヴェルジェンヌの外交官としての足跡を辿りながら、ヨーロッパ各地における現地調査によってフランス外交の実態とその把握に努めた。

(4) フランス革命との関係

ヴェルジェンヌの時代は、フランス革命に直結するまさにフランス革命前夜であった。この時期にヴェルジェンヌは王権側の最も重要な政治家であったにもかかわらず、わがくにのフランス革命研究の中に、ヴェルジェンヌに焦点をあてたものは、管見の限りでは、全くない。チュルゴやネッケルなど財政政策の中心者に関する研究は多いが、彼らと大きなかわりを持ち、王政主義を貫いたヴェルジェンヌの役割がほとんど無視されている。ここに、わがくにのフランス革命研究の大きな欠落の一つを見ることができる。今後は、この観点から、フランス革命との連関で、王政主義と共和政主義の関わりなどに関して研究をすすめていきたいと考えている。例えば、ルイ16世の即位により、ヴェルジェンヌが外務卿に任ぜられる直前の、いわゆるモーブー時代(1770-1774年)は、近年の研究史上では、フランス史における啓蒙絶対主義の時代、もしくは「大臣専制主義」Ministerial despotismの時代と規定されて

きているが、これに代わるルイ16世即位の時代をいかに定義づけるかが大きな研究テーマとなる。この問題が、フランス革命における王政の崩壊や共和政の樹立と関連していると思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件) 関連論文

森原隆「近世ヨーロッパ国家形成と「礫岩国家論」 J.-F.ショープ教授の近世国家論をめぐって」、(翻訳)J.-F.ショープ「近世のイベリア帝国：集合と分裂」、『プロジェクト研究』第10号、138～153ページ、早稲田大学総合研究機構、2015年。

〔図書〕(計1件)

森原隆「ヨーロッパとは何か 欧州統合の理念と歴史」、福田耕治編著、『E.U・欧州統合研究 “Brexit”以降の欧州ガバナンス』、2-22ページ、成文堂、2016年。(初版2009年を、修正の上、改訂版刊行)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

森原 隆 (Moriyama, Takashi)

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：70183663